

590

390

文祿慶長以後日本に於ける
朝鮮の感化
徳富猪一郎講述

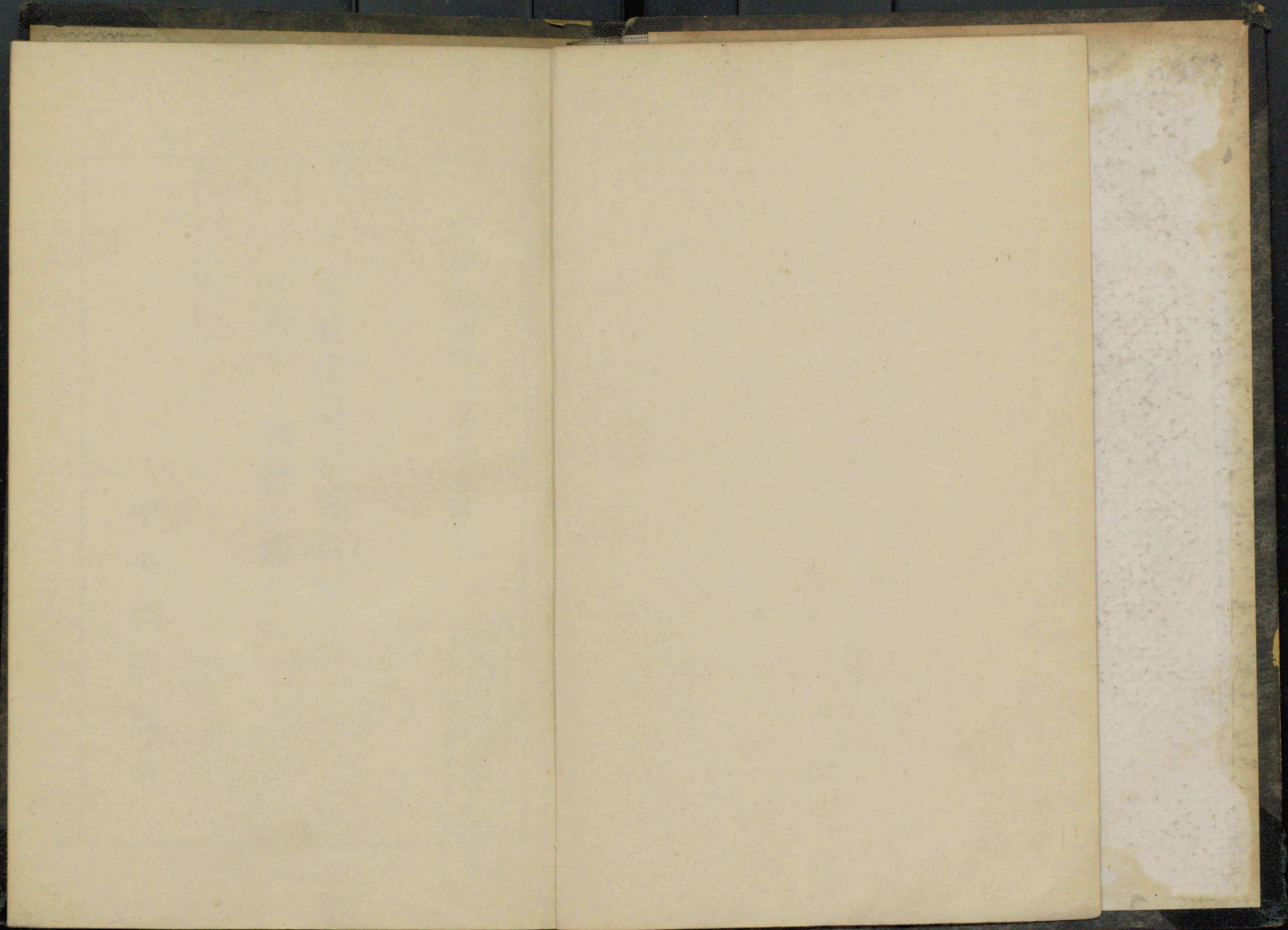
590-390



1200501525714

文祿慶長以後日本
に於ける朝鮮の感化

蘇峰 徳富猪一郎先生講述

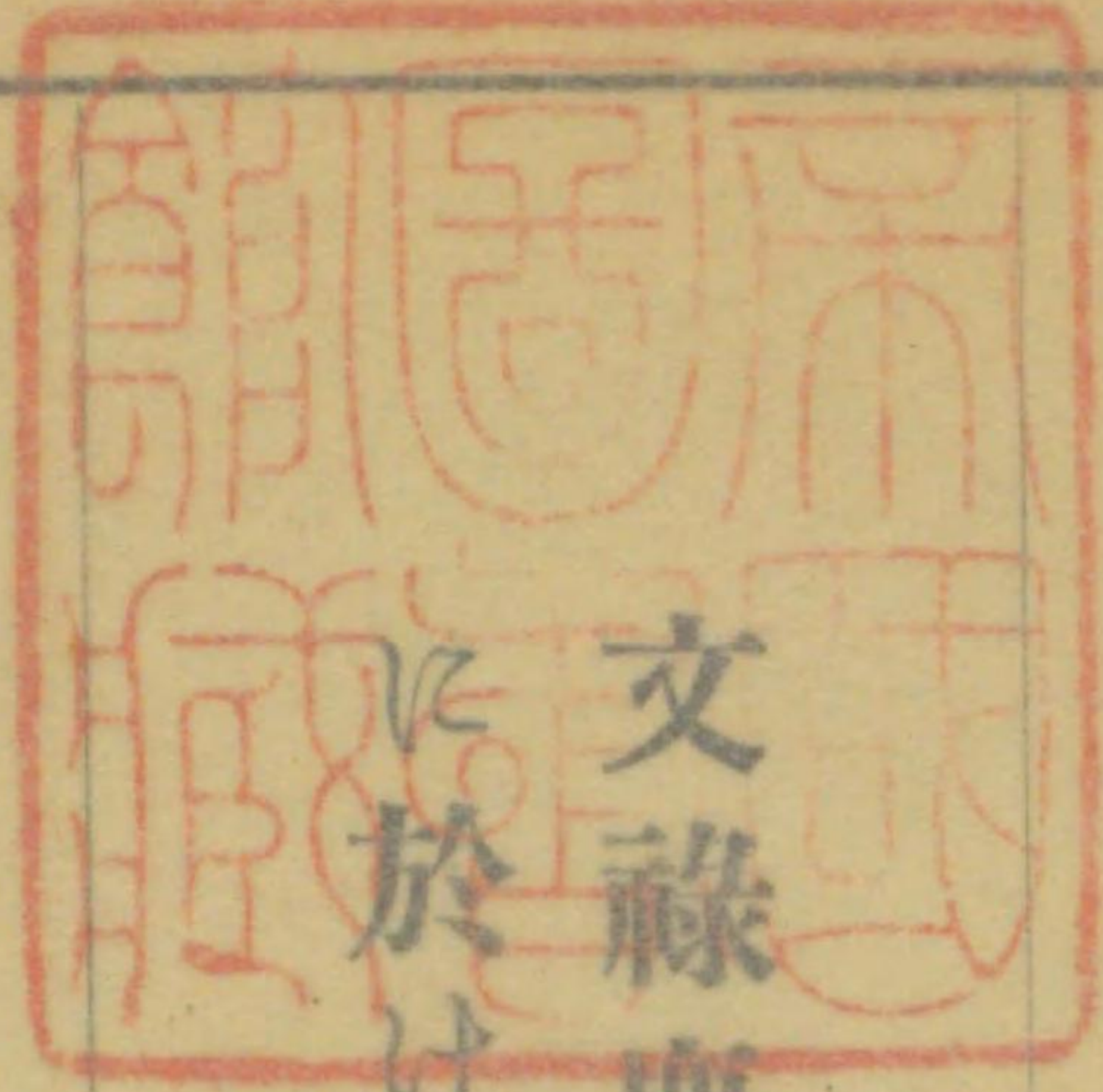


蘇峰 徳富猪一郎先生講述

發行所寄贈本

文祿慶長以後日本
に於ける朝鮮の感化

中央朝鮮協會

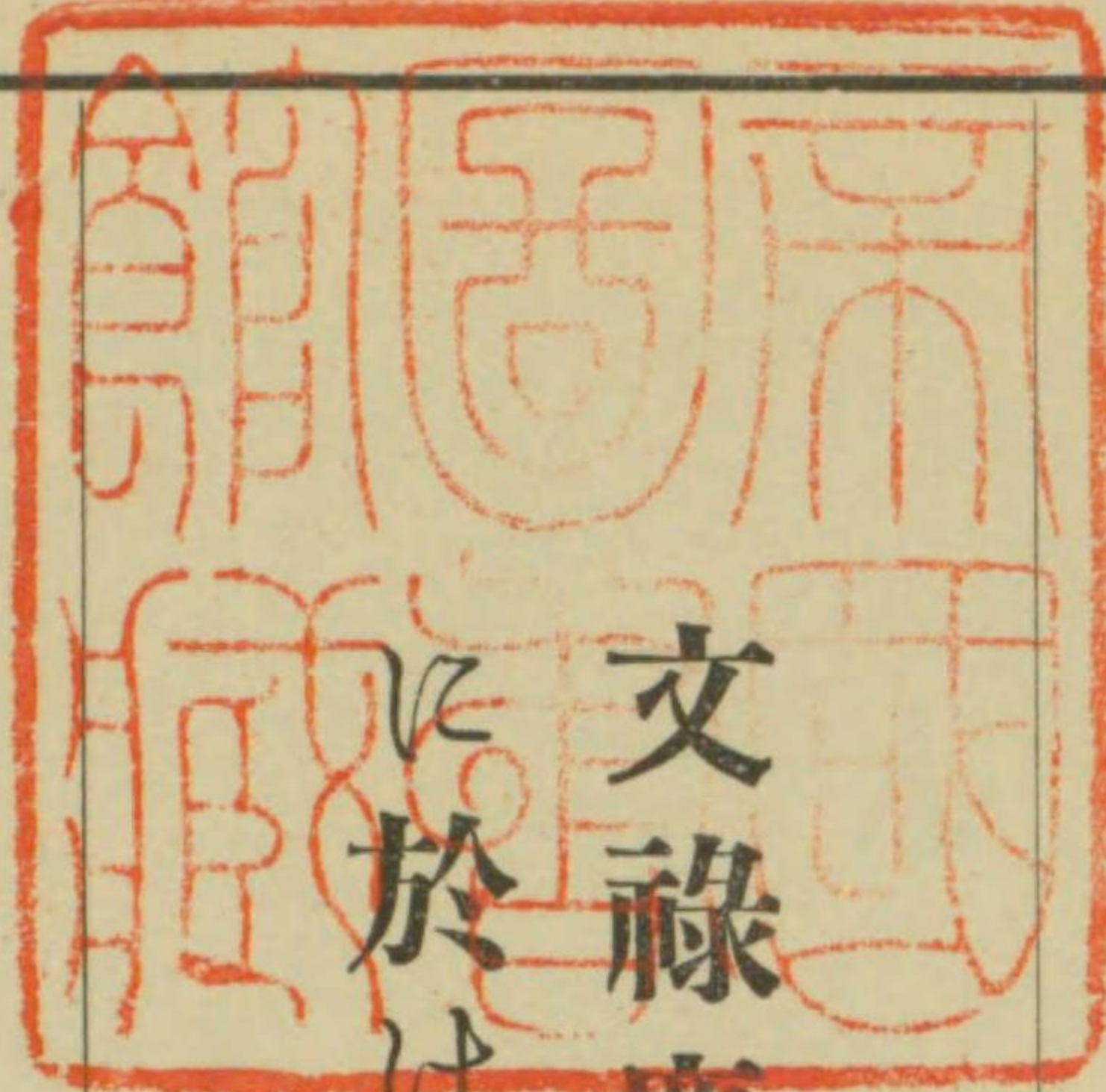


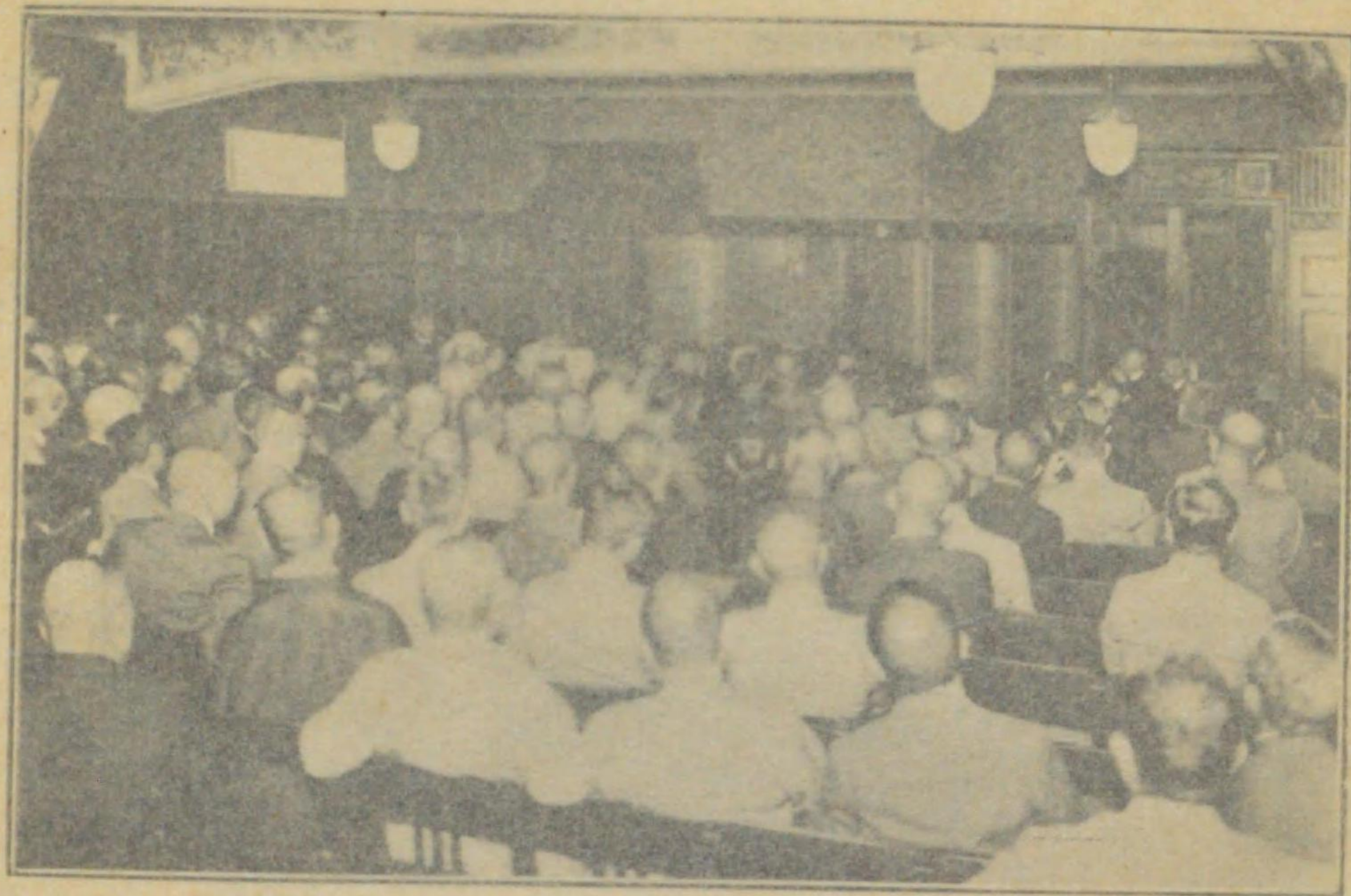
蘇峰 徳富猪一郎先生講述

發行所寄贈本

文祿慶長以後日本
に於ける朝鮮の感化

中央朝鮮協會





壇の上の蘇峰先生



史料展覧場の光景

發行所





壇の上の蘇峰先生



史料展覧場の光景

190-390

例言

本冊子は昭和五年五月二十四日青山會館に於て當協會が主催しました徳富蘇峰先生講演並に史料展覽會に於ける先生御講演の速記録であります。

當日出席の當協會々員は主に東京及其附近在住の方々のみでありまして、折角の此の結構な且つ容易に願はれない蘇峰先生の御講演を、遠隔の地方在住の多數會員各位にお聽かせ申すことのできなかつたことは、已むを得ないとは申せ洵に遺憾の至りでありました。又會員中の方々からも、先生の御講演を聽くことができず残念であつた、何とかして其の概要でも會報誌上に載せて貰ひたいとの御希望が頻りでありました。依て當協會は特に其の速記録を取り纏めて全會員各位へ御披露すべく茲に此の小冊子を編んで各位へ御願ちすることに致しました。

先生の警咳を髣髴たらしむるため速記録をその儘活字に致しました。又先生に校閲を願ふ違もなしに印刷に付しましたので、或は誤記其他遺漏の點もあらうかと存じます。其の場合は一に編者の責として先生にも亦各位にも御寛恕を願つて置きます。

尙ほ先生の此の講演録は何れ先生に依て増補改訂を加へられ、民友社より出版せられるやうに聞いて居ります。講演の席上では時間の都合等で省略せられた所も追加せられ参考資料も挿入されることと存じます。其節は各位に於かれまして是非一本を御備へあらむことを特に御勧め致します。

中央朝鮮協會

目次

阪谷會長開會の辭……………一

徳富蘇峰先生講演……………

文祿慶長以後日本に於ける朝鮮の感化

緒言……………三

新らしき日本……………五

舊き朝鮮……………八

朝鮮の史的環境……………一〇

日本の大陸交渉と朝鮮……………一二

日本上代に於ける朝鮮の感化……………一三

足利時代の交渉……………一七

日鮮文化の輪廻……………二〇

正平版論語……………二一

之より本題に入る……………	二四
壬辰役とは何ぞや……………	二五
壬辰役の日本文化に齎らせる貢献……………	二七
朝鮮本の大輸入……………	二九
活字の傳來……………	三三
『求めて』得たる珍書の數々……………	三四
捕虜姜沆と惺窩……………	三六
朱子學と國民思想……………	三八
李退溪の聲望……………	四〇
朝鮮國民性の一端……………	四二
日本の朱子學と李退溪……………	四三
歴史を讀め—日鮮同源の關係……………	四五
阪谷會長閉會の辭……………	四八
講演並史料展覽會記事……………	四九

開會の辭

阪谷會長

閣下並に諸君、今日は豫て申し上げました通り、中央朝鮮協會の會員の方々、徳富蘇峰先生の御友人の方々の極めて數を限りました範圍に御案内を申し上げます所が、斯く多數の御來會を得まして、私共寔に満足に思ふ次第であります。今日の催しにつきましては、先年來中央朝鮮協會の方から、徳富先生に御講話を願つて居りまして、先生に於かれては、自分の研究した歴史の事に就て話をして見たい、が然しまだ十分自分の満足の行く迄に調べが出来て居らぬから、假すに時を以てするならばと云ふ事で今日に至つたのであります。其後餘程力を入れて御調べになりました、既に其の材料等は別室に陳列してありますから、御覽を頂いた事と存じますが、私共初めて見る様な珍らしい材料を澤山お蒐めになつて居る。そこで今日『文祿慶長以後日本に於ける

朝鮮の感化』と題を御選び下さつた譯であります。朝鮮と内地との關係に就きましては、種々の點に於て研究する事が無論必要であります。殊に歴史上の研究觀察と云ふものが、合邦後の施設其他の上に關係を有する事論を俟ちませぬ。先生の豊富なる御研究、又た歴史に就ての特殊な觀察力に富んで居られる事は喋々を要しませぬ。今日の會には諸君と共に極めて有益なる御話を承る事を得ると存じます。諸君よりも更に御氣付の事など、又た歴史に洩れた事などを先生の方へ後から御話になれば先生の幾らかの御参考にもならうかと思ひます。然しながら今日迄の先生の御研究に對しては吾々寔に多とするのであります。其の研究の結果を今日先生から聽く事が出来ること云ふのは仕合せであります。唯今から先生の御講演を願ひます。御清聽あらんことを望みます。(拍手)

文祿慶長以後日本に於ける 朝鮮の感化

昭和五年五月二十四日 於青山會館

蘇峰 徳富猪一郎先生講述

緒言

本日御話申上げると云ふ事は、私に取りまして寔に光榮の至りでございます。唯今阪谷男爵より御紹介下さいましたが、丁度本日の東京日々新聞にも出て居りましたけれども、題があべこべになつて居ります。『文祿慶長以後朝鮮に於ける日本の感化』ではなくて、『文祿慶長以後日本に於ける朝鮮の感化』であります。若し私が朝鮮に於ける日本の感化と云ふ様な題で申上げますと、寔に月並の話であります。それは誰もす

る話であります。私の申し上げますのは其の逆なのであります。『日本に於ける朝鮮の感化』であります。

四

始終日本の人は朝鮮に向つては被せぬでもよい様な恩を被せて何時も大きな顔をして居るのであります。私、朝鮮人ではありませんけれども、非常に癢に觸つて居るのであります。(拍手)それで、是非私は、もう少し——決して朝鮮に最負するのではないが——もう少し正しく、事を吾々は考へなければならぬと思ひます。(拍手)それで私はどの位日本が朝鮮に負目おひめがあるか、又どの位朝鮮に貸目かひめがあるか、貸借對照表を作つて見やうと思つて、始終其事を考へて居るのであります。其のバランスシートを拵へて皆様に御覽に入れたいと思つて居ましたけれども、それを全部申すと大變時間が長くなりますから、假りに文祿慶長以後と云ふ事に致し、極めて近い事だけ御参考に申上げて見たいと思ひます。それも決して全部ではありませぬ。私の研究も極めてまだ足りませぬが、研究した事を申上げる事も恐らくは其の一部分に止まるであらうと思ひます。で私は政治上に於ても現内閣派でもなければ、在野黨でもない様な譯で、日鮮の問題に就ても出來得る限りに於て、一個單純なる歴史家としての態度に依つて、御参考迄に申上げて見たいと思ふのであります。

新らしき日本

第一其事を申上げるに就きまして、私共が考へて置く必要のございます事は、日本と云ふ國はどうか云ふ國である乎、日本の年齢を考へて置く必要があると思ふのであります。いつも吾々は日本國は三千年の歴史を持つて居る古い國であると云ふ事を申し居りますけれども、日本國もさうであるが、亞細亞洲は一體に人類の開闢の歴史を持つて居ると云はれて居るほど古いのであつて、最も古いのであります。

第一支那、印度、もすこし古く申しますとチギリス、ユーフラテス兩岸に在るメソポタミヤ、今日發掘して居る所のウール地方、バビロン、アツシリヤ、そこから邊りの

五

事を考へて見ますと、随分古い。五千年六千年はもう問題ではない。七千年に届いて居るのであります。然し日本はそれ程古くはない。古い日本の國であると思ふのは、丁度自分は貧乏して、金持の親類を持つて居ると云ふ様な譯であります。俺の伯父さんの家は金持に金がある、俺の叔母さんの家は金があると云つても、自分の家に金が無ければ矢張り貧乏なのに變りはありません。自分の隣國は古い、其の又隣國はまた古い、日本は餘程新しいのであります。親類だけは古い國であつて、その古い國の間に日本はあります。それを世界に向つて俺の國は非常な古い國だと云つて誇るのは、丁度金持を親類を持つて居つて、俺の家も金持だと云ふのと餘り變りはないのではないかと思ふのであります。(拍手) 唯だ日本で古いのは萬世一系の皇室である。此の萬世一系の皇室と云ふものは、三千年の歴史が有るのであります。斯かる皇室と云ふものは何處を探しても世界には無いのであります。古いばかりでなく、所謂英語で申せばユニツク、即ち獨特のものであつて(拍手)此の皇室の古いと云

ふ點に至つては私共勿論議論はないのであります。併し唯だ日本が古い國であると思ふことを考へるのは、それは考へ違ひであつて、日本はいづれかと云へば寧ろ新しい國なのであります。亞米利加合衆國や何かに比べますれば、それは古いのですけれども、考へて見れば、日本の古さと英國の古さなどは餘り異らぬのではないかと思ひます。吾々の先祖と英吉利人の先祖と、互に先祖比べをして、色々な事を云ひ合つたならば、丁度同じ位のことではないかと思ひます。それで日本は云はゞ新國である。亞米利加の如き最新國ではないけれども新國であります。新しい國であるからして、新しい國である所の缺點もあり、同時に新しい國である所の利益もあります。自分は老人だなど、云つて居るけれども、丁度若い者が老人の仲間に入つて、髯を生やして急に老人の様な風をして居ると同じ事で、日本自身みづから願ひて、己れはまだ新しい所の國であると云ふ事を考へなければ、日本の歴史は讀めないのではないかと思ふのであります。日本の歴史を三千年として置きますのは、是は日本に都合を良くして置いた

年齢の數へ方であつて、正確に申しますれば、もう少し減るであらうと思ふのであります。

舊き朝鮮

さう云ふ譯でございますから、それに比べれば支那も古いのであります。それから朝鮮であります。朝鮮をまるで自分の弟子か何かの様に、日本は考へて居りますが、日本に比べればずっと古いのであります。最近百年間位は日本の弟子になつて居た事が多いけれども、少なくとも日本が朝鮮に色々な事を教へたのは百年位とすれば、日本が朝鮮に物を習ふたのは大體二千年位であります。もつと多く習つて居るかも知れない。教へた年の多い少ないは次の事にしても、年代から申しますと朝鮮の方が古く日本の方が新しいのであります。それで朝鮮と日本との關係を論ずる時に、何時も日本と朝鮮が同じ年である云ふ事を考へるのは非常な間違である。朝鮮は老人なので

す。日本の方が若い。朝鮮の方が國民としては是迄年を取つて來ました。年を取つて來た結果は老ぼれになつたかも知れない。或は老衰したかも知れない。日本は若い代りに元氣があるかも知れない。未來が多いかも知れない。然しながら兎に角歴史上から見て、朝鮮が兄貴で日本は弟であります。兄貴と弟と角力を取る時に、弟の方が強くて兄貴が弱いと云ふ事はよくあるものです。大概は弟の方が強い。曾我の十郎と五郎とがやつて見ても、多分五郎の方が強い（笑聲）日本と朝鮮にしても、日本の方が昔から強かつた様であります。然しながら文化の開けた度から申しますれば向ふが先で、此方が後であります。そこを私共は考へて置かなくてはなるまいと思ふのであります。

朝鮮と云へば、御旅行をなさつた御方々は、禿げた山、藁の屋根、あれを見て、なる程朝鮮は未だ開けないな、是では困つたものだなと云ふ様な御感じをなされるかも知れませぬが、併し實際朝鮮は開けないのではない、少し開け過ぎたのであります。

此方では朝鮮は未だ花が咲かないと思つて居るけれども、さうではない、既に花が咲いてしまつたのです。一口に云へばさう云ふ譯で、日本とは少し調子が違つて居るのであります。そこを私共は考へて見なくては朝鮮との關係はわかるまいと思ふのであります。

朝鮮の史的環境

それから朝鮮の事に就て、一口御話申上げて置き度いと思ひますのは、朝鮮と云ふ國は恵まれた國であるか、恵まれない國であるかと云ふ事に就てでありまして、これは兩様の解釋が出来ます。何方にした處が、ごうも日本では到底朝鮮の事は解らない日本人と朝鮮人と云ふものは、ごうしても互に解りつこはない。吾々も朝鮮に何百年か住んで居れば解るでせうけれども、一寸解らない。と云ふのは、朝鮮は、民族を成して以來、如何なる場合でも敵から脅かされて居ります。御承知の様に漢民族が盛んなる時には、始終漢民族から脅かされて居る。大和民族が盛んなる時には始終大和民族から脅かされて居る。又肅慎民族——とでも申ませうか——肅慎民族の盛んなる時には、始終肅慎民族に脅かされて居る。時としては三つの隣國が盛んなる時には三方から脅かされて居る。時としては二つの隣國が盛んなる時には二方から脅かされて居る。現に明治の歴史を御覽になれば、明治の時代には、京城と云ふものは、露西亞と支那と日本と、此の三つの勢力の衝突點であつて、彼處で始終騒いで居つた。朝鮮の王様を此方へ持つて行き、彼方へ持つて行き、——恐れ入つた事ではありますが——さう云ふ事であつたのであります。是は明治の歴史ばかりではない。朝鮮開闢以來の歴史は始終其通りになつて來て居る。此の三つの勢力が時としては漢となり、時としては唐となり、一方で云へば勃海となり、遼となり、金となり、清となり、露西亞となり、今日に及んで居るのであります。日本に就ては初めから其通りで、其事を私共は一つ考へて置く必要があると思ひます。

日本の大陸交渉と朝鮮

もう一つは日本と朝鮮との關係であります。日本と朝鮮とは別であるけれども同じである。同じであるけれども別であります。御承知の通り釜山からは、まるで日本迄飛石傳ひである。一方には濟州島があります。壹岐、對馬、五島、平戸、博多、斯う云ふ所はまるで飛石傳ひになつてをります。日本海の方はどうであるかと云へば、御承知の通りである。北の朝鮮から眞つ直ぐに船が流れて行けば、直ぐに敦賀に着きます。又た少し下つて參りますと、直ぐに島根縣の境に着きます。長州の端から朝鮮迄は、天氣の好い日は殆んど見通しが付くと云ふ位に接近して居るのであります。其の間には竹島など、云ふ島があつて、此處には朝鮮人も日本人も互に往來して居つたのであります。そこで今日北陸、山陰兩道に於ては、殆んど朝鮮とは壁一重で、又た九州とも飛石傳ひであります。

さう云ふ譯であるからして、朝鮮と日本との間と云ふものは、往つたり來つたりして、殆んど一緒になつて居る。さうですから、それを一々吟味して見ますと、朝鮮はまるで日本の大陸の勢力に對する防禦の第一線に立つて居る様な譯であるので、時としては朝鮮が向ふの方の味方として日本にやつて來た事があり、時としては朝鮮が此方の味方として向ふを防いだ事もあります。けれども兎も角も日本の力、大陸の力の所謂緩衝地帯と云つて宜いと思ふ。朝鮮から云つて見れば、實は迷惑な話であるが、それが時としては向ふに動き、時としては此方へ動く。此方が強ければ向ふへ動き、向ふが強ければ此方へ押して來る。それも文明の入つて來る上には都合が好いが、文明ばかり入つて來ればよいけれども、序でに色々なものが入つて來る。有難いものばかり入つて來ればよいが有難くないものも非常に澤山やつて來るのであります。(笑聲)

日本上代に於ける朝鮮の感化

それで私は今日、文祿慶長の時から朝鮮が如何に日本に感化を及ぼしたかと云ふ事を申上げる前に、少しく其の以前に溯つて、極めて概括的に、どう云ふ事を朝鮮が日本に與へたかと云ふ一二の點に就て申上げたいと思ふ。いろいろ研究をすれば數限りもなく、又た想像すれば數限りもありませぬ。然しながら私の今茲に申上げんとする所は、既に國史に掲げてある所を申上げるのであります。

日本の國史に掲げてある所を申上げますと、應神の朝に阿直岐、王仁……是等の人々がやつて来て、其時に織工オリタクミ、衣縫女キヌぬいめを率ゐて來たと云ふ事があります。是等は實に面白い。應神の朝に、きぬを縫ふもの、即ち縫針をする者が來ました。是は太閤さんの時にもやつて來て居たのであります。太閤さんのみならず、毛利家にも鍋島家にも來て居ります。あすこに陳列してある物を御覽になると、太閤から鍋島家に『お前の分捕した内に、縫針の上手な者が居るさうだが、乃公の方へ譲つて呉れ』と云ふ様な手紙が行つて居る。さう云ふ様にして朝鮮人の縫針師を使つたのであります。朝鮮人

は餘程日本人よりも手の先が器用であつたのだらうと思ふのであります。其外應神の朝には御承知の通り『かぬち』所謂鍛冶工が來た。又た機を織る者が來た。日本には初めから金銀銅鐵と云ふものは無いので、それは悉く朝鮮から來たらしいのであります。よそからも無論來たかも知れぬが、然しながら其の主なるものは朝鮮から來たやうに思ひます。貨幣など、云ふものも日本には無かつた。多分朝鮮のものを日本が用ひて居たのだらうと思ひます。近頃戸越に有名な、田中君と云ふ、貨幣を蒐めて研究して居る人の云ふ所に依つても、日本の貨幣は和銅以前に溯つたものは一つもない。

繼體の朝には百濟から五經博士段揚爾が來て五經の學を傳へた。欽明の朝には百濟王が佛像、經論等を献じ、それから續いて醫、易、曆等の博士、採藥師、樂工がやつて來た。敏達マニタの朝には經論及び律師、禪師、佛工、寺工等を献じたといふことがあります。つまり我が文化の初の時に當りまして、單に學問ばかりでなく、醫者も來た、呪禁マジナヒをする者も來た。曆を作る者も來た。灌漑かんがいをする人も來た。藥を作る人も來た。

樂を奏でる人も來た。比丘尼も來た。佛工も來た。寺を造る者も來た。あらゆる者を朝鮮から持つて來て居るのであります。

又た聖德太子の時……推古の朝には瓦工―瓦を造る者、畫工―繪をかく者が來て居ります。それから尼、禪尼等を百濟に遣はし佛法を學ばせたと云ふ事があります。日本から朝鮮へ佛教の留學に行つたのであります。そして其の行つた者は男でなくして女であります。日本の留學生の最初は婦人なのである。又た其頃は百濟ばかりでなく高麗の國からも澤山の坊さんが來ました。色々なものが澤山に朝鮮から渡つて來たのであります。斯う云ふ事は一々申上げる迄ありませんが、聖德太子の時代には高麗の曇徴と云ふ有名な僧侶が參りました。此人は五經にも通じ、繪をかく事も上手であるし、紙を造る事、墨を造る事、凡てさう云ふ事をやつた。それから百濟の人味麻之と云ふ者が日本に歸化して吳の伎樂を傳ふと云ふ事があります。百濟人が吳から學んだ伎樂を傳へたのであります。先づ大概此位の事にして置きますが、兎も角日本

の上代に於ては、あらゆるものは先づ朝鮮から來たのであります。織物も朝鮮から來た。金屬を造る事、鐵を鍛ふ事も朝鮮から來た。あらゆる物が朝鮮から來ました。もとより此外に支那からも澤山來て居りますが、兎に角朝鮮の方が近くて便利でありますから、支那の物でも矢張り一度は朝鮮を基點にして日本に來たと云ふ様な事になつたのであります。

足利時代の交渉

飛んで足利時代に至りますと、日本と朝鮮との交通は、非常に頻繁であつたのであります。其の時分は朝鮮から來るばかりでなくして、日本からも盛んに行つた。貫つたり何かする事は面倒であるから泥棒に出かけたのであります。(笑聲)所謂倭寇と云ふのは何所を荒したかと云ふと、支那を荒し、朝鮮を荒したのであります。吳れと云つて頭を下げて貰ふよりは、ふんだくつて取つて來た。早く云へば手數のかゝらない

文化の輸入をやつたのであります。(笑聲)然しながら中々そればかりでは承知しない。腕で取る物は腕で取るし、相談で取る物は相談で取つて居ります。取れる限り朝鮮から取つて来た。其の時分の往復文はあすこの陳列室に『善隣國寶記』と云ふ本を出して置きましたから御覽になると判りますが、大概日本から朝鮮に對する手紙は無心であります。何を呉れ彼にを呉れと云ふ無心の手紙であります。(笑聲)朝鮮からの手紙は、差し上げますからどうぞ荒らさずに置いて貰ひたいといふ願の手紙であります。

(笑聲)例へば應永二十九年に將軍義持が朝鮮の王様に送つた手紙に『曾て釋氏の藏經を求む。皆な願の如きを得たり。今復た不盡の求めあり。重ねて一藏を請ふ』とある。即ち一切經を求めたところが、それを下さつた、甚だあつかましいがもう一つ呉れと云ふのであります。隣寸一つや何かならばもう一つ呉れでも何でも宜しいけれども、それが一切經である。一切經を此間貰つて置いて、今又盡きざるの求あり、重ねてもう一つ呉れといふのであります。一切經などをさう度々貰はれてはたまるものであり

ません。然し後からは一切經をもう一つのみでは承知せず、其の版本を呉れと云つてやつたのであります。應永三十年の手紙に『使を上げたが、頂戴すると申上げた所の一切經も貴方の御使と一緒に參つて寔に愉快である』と云ふ様な文句の後に『聽く貴國の藏經版は一にあらず』貴方には版本が幾つもある様であるから、其の版本を一つ私の方へ頂戴すれば、度々貴方に御面倒を掛ける事も要らぬから、私の方へ一通り頂きたいと云つて遣つたのであります。是には朝鮮の方も困つて、是だけは謝絶しました。私の方には版本は一つ丈けよりありませんから、是だけはゆるして貰ひ度いと斷られて居ります。さう云ふ様に可なり厚かましく云つてやつてゐるのであります。(笑聲)一切經ばかりでなくあらゆる佛書も其の調子で取りました。中には寄附金迄朝鮮へ募りに出かけたのであります。寺を建てるから寄附しろと云つて出掛けた。大内家などは、自分の先祖はもと朝鮮人であるから、自分の國で寺を建てるに就て寄附金を寄越せと云つてやつて居ります。その逆を云へば大内家は何か朝鮮にやらねばならぬ

のに、寄附等を募つてゐる様な譯であります。足利時代に於ては、一方に倭寇あり、一方では堂々と使が行つて、兎も角も日本は朝鮮から色々な物を取つて居るのであります。

日鮮文化の輪廻

然しながら、其の時分に如何に盜賊や何か互に往來しつゝあつたに拘らず、其間に文化の流通があつたかと云ふ事を御覽になる爲に、あちらに一つの證據を出して置きました。それは『詩人玉屑』と云ふ本であります。是はもとより日本で出来た本ではなくして、支那から入つて来た本でありますが、有名な玄惠法師が此の書物を見て訓點をした。其の訓點をした書物が朝鮮に参りまして、朝鮮で之を翻刻して居ります。訓點の年代は正中で、後醍醐天皇の御代です。まだ足利尊氏の騒ぎにならぬ前です。其の書物がどう云ふものか朝鮮に参りまして、朝鮮で之を翻刻して居る。其の翻刻に

は『正統己未冬二月』尹炯と云ふ人の跋文を加へて出版して居ります。朝鮮の正統己未と云ふのは我國の永享十一年であつて、丁度後花園天皇の御代、將軍義教の時代であります。

然るに朝鮮で其の跋を加へた本を又た我が寛永十六年に其儘出版して居るのであります。同じ一個の『詩人玉屑』と云ふ本が支那から日本に入りまして、之を玄惠が見て跋文を書き訓點を加へました。それを其儘朝鮮で跋文を加へて出版し、それを又た其儘日本へ持つて来て寛永十六年に出版して居る。同じ一つの本が三つに廻つて居るのであります。是は一つの書物の経緯を申上げたのでありますが、如何に朝鮮と日本の文化がくるくると廻つて行つて居るか云ふ事が、それで御解りになるだらうと思ひます。

正平版論語

此の場合に於きまして、序でながらも一つ御話を申し上げますと、論語です。あすこに正平版の論語を出して置きました。正平版と申しますと楠正行などの時代の論語です。其頃堺で論語を出版した、其の出版した論語ではなく、それを寫した所のものが朝鮮に渡つて、それを明軍の參謀長―監軍とありますから目附役である所の蕭應宮といふ偉い將軍が、朝鮮から明へ持歸つたのであります。そしてそれが支那の有名なる藏書家の錢遵王と云ふ人の手に歸りました。其時に、其本に書いてある正平と云ふ年號は朝鮮の何時の年號か判らぬが、珍しい字で、寫し方が妙である、結構なものであると云ふ事を其人が云つて居ります。其事を書いてあるのがあすこに陳列してあります『讀書敏求記』と云ふ本であります。書物を愛する人は大概『讀書敏求記』と云ふ本を知つて居ります。所が其の寫しの論語が轉々して、偉い評判になつて、色々な人の手に渡り、遂に有名なる黃蕘圃と云ふ人の手に渡りました。此人は又た黃丕烈と申しまして、支那に於ける書籍學の大家で又た珍書の最も有名なる藏書家であります。

此人が色々な事で調べて初めて正平と云ふのは朝鮮の年號ではない、日本の南朝の年號であると云ふ事を研究し出したのです。所が其本が又た轉々して陸心源と云ふ人の手に渡つたのであります。御承知の通り陸心源と云ふ人は、近代に於ける有名なる藏書家であります。其の陸心源の藏書の始んど全部が、我が岩崎男爵の手に入り、それで今日は其の論語は玉川の靜嘉堂文庫に在りますが、一冊の論語が、然も正平年間に出版し、其後寫したものが朝鮮に渡つて、そしてそれが征韓の役に明の大將の手に渡り、それから明の藏書家、清朝の藏書家等あらゆる藏書家の手に渡り、最後に近代の最も有名なる陸心源の手に渡つた。其の陸心源の藏書全部を先年岩崎家が買はれたので、今は其本が岩崎家の藏書中にあります。私はまだ其本に直接面會したことがありませんが、然しながら來て居る事は岩崎家の藏書誌に書いてある、それは確かであります。一つの論語でありますけれども、日本から朝鮮に、それから支那に行き、支那の北から南へくる―旅行して、今又日本に還つて玉川に在る譯であります。是は唯一つの

書物の歴史を申上る様であるけれども、支那、日本、朝鮮此の三國の文化が如何に歩いて行くかと云ふ事は此の一つの書物の歩いた跡を御覽になつても大概御見當の付く様な譯であつて、何所か隣近邊で火を焚けば、其の煙は餘儀なく隣に行く様な事になり、此方は隣を煙たがらせやうなごゝ考へないでも、隣には煙がどうしても行く、自分の家に花が咲けば、どうしても隣の人に見せぬと云ふ譯には行かないのであつて、隣の人も出入りには黙つてそれを拜見すると云ふ譯で、近くに居れば致方が無いのであります。況や日本と朝鮮とは近い内にも近いのでありますから、互ひに關係があると云ふ事は申す迄も無いのであります。(拍手)

之より本題に入る

茲で漸く本題に來たのですが、今後申上る事は是で盡きて居ると云へるのでございます。玄關が長い所は必ず奥行は狭いものです。(拍手)私の話も決して醫者の家の玄關の様な譯で申上げた積りはありませぬが、餘り前口上が長くなつたからして、本題は極めて短かく申上げます。

壬辰役とは何ぞや

そこで文祿慶長の役、即ち壬辰の役は、一口に申せば朝鮮征伐と云ふのですが、實はさうぢやないのです。支那征伐なのです。兎に角支那と交通をしたいと云ふのに、どうしても支那と相談の道が無いからして、朝鮮に向つて、御前は支那の親類だらう、だから乃公に紹介狀を書けど、斯う云ふ譯であつて、弱い隣家——朝鮮——を虐めて紹介狀を書かせやうとしたが、朝鮮では、唯だ貴君が行くなら紹介狀を書くけれども、行つて荒すと云ふ様な事では私も困るから、まア暫らく勘忍して呉れと斯う云ふ譯であります。さうすると、怪しからん、先づ貴様からやつ付けるぞと斯う云ふ譯であります。それで朝鮮征伐と云ふ言葉は非常に間違つた言葉で、太閤さんは唯だ朝鮮を経

由して行くつもりであつた。西郷南洲先生が熊本城を攻めたのも、是は熊本城を攻めるのではない。熊本は唯だ通つて、馬關から大阪に行つて、それから東京に行くこと云ふだけの積りであつた。所が熊本が之を食止めやうとしたから、熊本で戦さがあつたのであつて、西郷先生の戦を熊本城との戦さの様に云はれては、ごうも西郷先生は別として桐野にしても篠原にしても、浮ばれないに違ひない。それと同様に、秀吉も朝鮮征伐など云はれては迷惑千萬で、秀吉は朝鮮を取る爲に遠征したのではない。實は明を取りたいと云ふのがあの人の考でありました。止むなく朝鮮と戦をしたが、事が思ふ様に行かないで、朝鮮征伐に終つたのであります。丁度東海道を歩かうと云ふ人が小田原迄行つたと同じ様なものであつて、あの人も小田原行と云はれては少し困るのと同じであります。さう云ふ譯で目的は始終明にあつた。私は秀吉の爲に辯護するのではないが、秀吉は決して朝鮮を討つ積りではなかつたのでありますから、朝鮮の人も秀吉が憎いと云ふのは間違ひであります。秀吉は決して朝鮮を憎んで居らない。

唯だ俺共の通る道を遮ぎるのは怪しからんと云つて癩癩を起したに過ぎない。朝鮮に對しては寧ろ親しみを持つて行つたのであります。自分の親類位に思つてゐて、謂はゞ朝鮮に露拂をさせて、ずつと明に乗込まうと云ふのが真相であつたと思ふのであります。

壬辰役の日本文化に齎らせる貢献

扱て朝鮮へ行きますと、行つた連中の中には、朝鮮を賑はすのでなくして、何か目ぼしい物を手に入れたいと滅茶苦茶に取つた。取るのにも銘々流儀があつて、茶の湯や何かの好きな人は陶器などを取りたいと思ふ。又た特に清正などの様に實利主義の人は、茶の湯などでなく、熊本の城の何かの材料にでも取りたいものだと思ふ。さう云ふ様な譯で、銘々好きな物を取つて來ました。中には取る物が無くして、石まで取つて來ました。御承知の通り島津家あたりでは中々大きい石を取つて來られた。大き

い石を運賃をかけて取らうとすると中々安くない。熊本に高麗門と云ふのがあります。多分門まで持つて来たのでせう。又た物ばかりでなく、物を造る者を澤山連れて歸りました。其の時分最も盛んであつたのが茶の湯であるからして、茶器を持つて来たばかりでなく、陶器を造る者を連れて来ました。今日日本の有名な陶器は、其の全部とは申しませぬけれども、多くは皆な朝鮮の影響を受けて居るのであります。そして朝鮮から来て居る所の、例へば薩摩焼の如きは、之を造る所が殆んど朝鮮人の一つの部落になつて居たのであります。今日でも其通りであります。長州の萩焼、筑前の高取焼、豊前の上野焼、熊本の高田焼、肥前に至りましては、唐津、伊萬里、有田など、あらゆる肥前の陶器と云ふものは、朝鮮人に依つて焼かれてゐるのであります。今日に於きましても、日本に朝鮮人の墓が幾つあるか判りませぬ。肥前の或る部分には、殆んど朝鮮人の焼物をする人々の部落が出来て居た位であります。それで日本の陶器は壬辰の役以來全く一變したのであります。陶器ばかりではない、塗物、縫物或は繪畫などにも影響があつたのではないかと云ふ説があります。其の時分の繪に、頸が長くてひよろ長い人間を書いたのは、多分朝鮮から持歸つた繪の模寫であらうと云ふ説もあります。又た今日足利氏時代の宋元の繪と云はれて居るもの、内には朝鮮の繪が餘程加はつて居るだらうと云ふ説もあります。

朝鮮本の大輸入

さう云ふ様にあらゆる物を持つて来ました。其中に於きまして最も多く持つて来たのが、書物であります。書物はどの位朝鮮から持つて来たか私共には判らない。全く是は何の爲に持つて来たか知らないけれども、非常に持つて来ました。其の當時の諸將は書物屋でも始める積りではなかつたかと思ふ位皆なが持つて来ました。當時の諸將が朝鮮から持つて来た書物を、若し列べたならば、神田の神保町邊りの店は幾つ出来るか知れないと思ふ位であります。其中でも誰が一番澤山に書物を持つて来たか

判らないけれども、集めた人は徳川家康であります。家康は自分では行かないけれども、人の持つて来た物を大概はふんだくつた。ふんだくつたと云つても、素より只だ取つたのではありますまいけれども、然し家康の持つて居た朝鮮の書物の多い事と云ふものは、實に恐るべきものであります。私は今日茲に澤山其の目録を書いて來まじなければ、さう云ふものは申上げませぬ。家康が死なれた時に一番可愛い御子さん方に御分配になつた所の書物が、水戸家、尾州家、紀州家の三家にあつて、其の分配の目録と云ふものが完全に残つて居りませぬけれども、稍や完全なものが尾州家に残つて居ります。今日の徳川義親侯の家に残つて居る。其の目録を見ますと實に素晴らしいものでありまして。どの位多いか殆んど判らない位であります。今日も多分それが現存して居るだらうと思ひます。徳川圀順公——水戸家——の方には目録が無い。然し現存して居る物の中には朝鮮本が餘程あります。それから慶長年間、まだ家康公が死なれない前、形見ではなくして息子の秀忠公に書物三十部を贈られました。三十

冊ではない。其の三十部が寛政頃迄に二十四五部残つて居ります。其中で二十二部迄は朝鮮本であります。申して見れば朝鮮本のあらゆる物を先づ徳川家康公が呑んでしまつたと云つてもよいのであります。其次には毛利家です。毛利家が餘程の書物を持つて來られた。其の書物は大概萩の洞春寺と云ふ寺に納めて置かれたと見えます。現にあすこに其の書物が出てあります。それからもう一つは醫者の曲直瀬道三、是が大變な書物好きでありまして、當時朝鮮で毛利輝元が病氣の時に道三を呼んだと云ふのであります。それは毛利家ではなく浮田秀家だと云ふ事が傳へられて居ります。兎に角浮田秀家の病氣を道三が診ました時に、何か御藥禮を差上げませうと云ふ事になつた。さうすると道三の申されるには『何も要らぬ、どうぞ本を持つて來て下さい』さう云ふ譯からであつたか、曲直瀬家の本と云ふものは非常なものであつて、養安院藏書中にあらゆる朝鮮本が多くあります。のみならず支那の本もあります。つまり朝鮮に輸入した支那の本及び朝鮮で出來た本を根こそぎ持つて來た。先づ私の考へます

所では、今日朝鮮本の主に出て來ましたものは徳川家、毛利家、曲直瀬道三。そこら
が先づ主なものであらうと思ひますが、或は仙臺の伊達家、米澤の上杉家、加州の前
田家、其他諸方にもあると思ひます。此席には蜂須賀侯爵が御出でになつて居ります
が、多分侯爵家邊りでも御持ちになつて居ると思ひます。其の藏書目録の中には朝鮮
本がありますが、多分さうではないかと思ひます。

其の時分には書物ばかりでなく色々の物を持つて來た。馬や何かも持つて來ました。
此席には蜂須賀侯爵が御出でになります。碧蹄館の戦ひの時に、立花宗茂の所へ侯
爵の御先祖から出された手紙が、立花家に残つて居ります。『お前も武功を立て、誠に
仕合せである。然るにお前は多分今度明軍から澤山の馬を分捕したであらうから、一
匹乃公の方に寄越せ』と云ふ手紙であります。是は多分種馬に使はれたのであらうと
思ひます。さう云ふ譯で人間も馬も書物も、あらゆるものを持つて來ました。

活字の傳來

又た書物ばかりでなく書物を造る所の活字を根こそぎ持つて來ました。それで文祿
慶長頃の日本の出版には活字本がある。今の活字とは違ひますけれども、活字版があ
ります。第一は木活、第二は銅活です。さうして活字を持つて來、又持つて來なけれ
ば其の方法を傳受して來たのであります。それには茲にちやんと慶長二年に勅刊と云
ふものがあります。其時の後陽成天皇は、家康と御競争遊ばして書物を出版なされた
のであつて、其の御出版は慶長二年に『錦繡段』『勸學文』と云ふ、二つ共小さい餘
り厚くない本でありますが、立派な本であります。私も持つて居れば出版したいと思
ふけれども、私共の手には渡りませぬ。今日でも勅版を持つて居る人は、日本に全く
無いとは云へませぬが、餘程少ない。唯だ然しながら斯う云ふ事が書いてあると云ふ
事であります。其の勅版の後ろには『此法朝鮮より出づ』——此法と云ふのは活版の

方法であります。『天聽に傳達す。乃ち彼の様に依て工をして摹寫せしむ』とあります。是は朝鮮の字から御取り遊ばしたのでなくして、朝鮮の活版の方法を日本に傳へて、其の傳へたものに依つて活字を御作らせになつて版にしたのであります。天聽に達したと云ふ事は、斯う云ふ方法があると云ふ事を 陛下に申し上げたと云ふ事でありませう。之れが慶長二年の事である。慶長二年は朝鮮の戦さの最中で、慶長三年の八月に秀吉が死んだのですから、それは秀吉のまだ生きて居る時分であります。さう云ふ様にして活版の方法が出来て、それ以來殆んど日本の書籍出版の方法は活字版であります。佛書も儒書もそれでありませう。あらゆるものをそれで作つて來たのであります。さう云ふ様に先づ書物を輸入し、それから書物を作る道具を輸入して、やつて來て居ります。

『求めて』得たる珍書の數々

其中には餘程深い所まで入り込んでとつたものもあります。前田家で御持ちになつて居ります所の『重廣會史』、あちらに私が其の複本を出して置きましたが、あれを御覽になると、——あの本は支那には無い——あれが朝鮮の何所から出たかと云ふ事は、判が押してあるから判つてるのでありますが、唯だどうして取つて御いでになつたか判らない。鹿兒島でも朝鮮から中々澤山の本を取つて來られましたか、それには中々伶俐な事が書いてある。『右の書物は藤原少將朝臣忠恒朝鮮國平伏の辰此本を求め』云々とあります。『此本を求め』とありますから本屋から買つて來た様であります。是は餘程うまく書いてある。斯う云ふ風に書けば物は極めて穩やかであります。(笑聲) 兎に角朝鮮から求めて來た數は非常なものであります。(笑聲) 其中で最も大切な良い本を求めて來たものは、誰が求めて來たか判らないが、結局手に入れた者は徳川家です。それから前田家です。徳川家のものは今は御上の圖書寮にあります。是は實に面白いものでありまして、それにはちやんと其事が書いてあります。『高麗國十四

葉辛巳歲藏書大宋建中靖國元年大遼乾統元年』とあり、自分の國の年號を書かず宋の年號を書いてあります。これは北宋の末期徽宗皇帝の時分であります。日本の年號では堀河天皇の康和三年であり、西曆で申せば千百一年、今より八百餘年前の本であります。それに經筵と云ふ印が押してありますが、是は朝鮮の王様の事で、王様が御自分の勉強の場所に置いてあつた本なのであります。それが求めて來た本の中に交つて日本に渡り、諸方に珍藏されて居ると云ふ譯であります。

捕虜姜沆と惺窩

所が之ればかりではない。是からは人であります。書物を拵へたり、輸入したりするばかりでなく、其の時分朝鮮から人間がやつて來ました。つまり人間を捕虜にして連れて來たのであります。然るに其の捕虜の中に偉いものが居つた。姜沆と云ふ人間が居ります。是が藤堂家の捕虜になつて來ました。其頃藤堂家は伊豫に居られたから、

伊豫に連れて行かれたのでありますが、それが段々上方の方へ來て藤原惺窩と交際して居りました。是が中々偉い捕虜で、非常に文章がうまくて、學問があつて、あそこに出して置きました『看羊錄』を見ますと、當時の歴史はすつかり判ります。此本を見ると、石田三成の事、毛利輝元の事、家康の事、小西と加藤の事などがよく判ります。此本を此の捕虜の姜沆が書いたのですが、まるで捕虜になつて居て、朝鮮の方の探偵をも兼ねてやつた。探偵を兼ねるばかりでなく學者であつて多少教へる所もあつた。それで惺窩先生は彼と非常に親しく交つたのであります。當時惺窩が今の亞米利加最負の人の云ひさうな事を云つて居る。『自分も日本に生れたのは非常に不仕合せである。今日是非ど日本の様に困つた事はない。若し朝鮮が明と合併して仁義の軍を起して日本を征伐するならば、其軍の白河關外を超ゆる事も難くはない。然しながら日本が復讐的にやつたならば征服は難かしからう』と云ふ様な事を云つて居ります。然し是は朝鮮人の云ふ事であるからして、割引して聞かなければならず、又た朝鮮人に向

つて話したのですから、幾らか御世辭もあつたかも知れず、先づ朝鮮人の云ふ事で三割、惺窩先生の御世辭で三割だけ割引したとしても、四割だけは惺窩先生の思想が餘り純粹でない云へるのであります。私は惺窩を攻撃する譯ではありませぬけれども、先生が自分の弟子の林羅山に語つて居る所もさうである、『おれも日本に生れたのは不仕合せである。然かも日本の今日の世に生れたのは不仕合せだ』と云つて居ります。

朱子學と國民思想

然し日本に外國の學問の入つて來る時には、何時も其の調子で入つて來る。英學の入つて來た時にもさうであります。昔し佛敎の入つて來た時にもさうであつたと思ふ。惺窩先生の思想は決して國民的でない。寧ろ國民的の上に『非』の字を加へた方が或は適當ではないかと思ふ様な場合もあります。然し思想と云ふものゝ動きは不思議なのです。非常に勉強した擧句は必ず反動で睡くなる。非常に物を喰へ過ぎた後は必ず

誰も物を食べたく無くなる。又た非常に空腹な時には誰でも喰ひたくなるものです。それで日本の國民主義と云ふものは、初め非國民主義から起つて、之に對する反動ですつと起つて來たのであつて、初め朱子の學問をやつた人々は、ごつちかと云へば支那崇拜の人であります。所が支那崇拜の人がどうして起つて來たかと云へば、ごうも是は止むを得ない色々な事を教へられて居る。ごうも支那が有難いと云ふ様に考へ、支那でいかなければ朝鮮でもよいと云ふ風になつて來ます。所がそれが段々やつて行く内に其の氣風が旺んになつて、是ではいかんと考へる様になる事は當然であります。あすこに『春秋左傳』を出してありますが、是は矢張り牧村と云ふ人が分捕して、つまり朝鮮から求めて(笑聲)來たものであります。其の牧村と云ふ人は利休七哲の一人で、あの本を自分の兄弟の坊さんへやつたのである。其の牧村と云ふ人の娘が有名な祖心尼です。其の祖心尼に養はれた人が山鹿素行です。山鹿素行と云ふ人は朱子學者ですが、今の思想には反對した人であつて、今日で云へば國民的と云つてよ

いか、何と云つてよいか分らない様な主義の人であります。惺窩とは約五十年の隔りがある。其間に日本の思想と云ふものがどの位變つて來たか判らない。五十年の間に學者の思想が變つて來たが、然し矢張りごちらも朱子學である。朱子學の思想が世界主義の様な思想になつたり、又た國民主義の様な思想になつたりして居るのであります。朱子學にも幾通りもあつた。御承知の通り御維新の時にも勤王派の朱子學もあれば、佐幕派の朱子學もあつた。兎も角も學問の性質と云ふものはさう云ふ様にして入つて來たのであります。

李退溪の聲望

それから今の姜沆と云ふ人の外に、其の時分に御承知の通り日本に初めて副使としてやつて來た、金鶴峯と云ふ人があります。あすこの壁に掲げてある書は李退溪の金鶴峯に贈つたものであります。此の金鶴峯は李退溪の弟子であります。日本は戦さ

する元氣が無いと云ふ事を報告して歸つてからひどい目にあつた人です。自分が悪いと云へば勸辨が出来るが、是は誰が悪いと云ふ様な事を云つて責任を他に嫁する様な事をした。是などは論ずるに足らぬ男であります。然しながら兎に角李退溪の門人で學問もあるし、中々言を以て非を飾る事の上手な男である。それと惺窩先生は交際して段々色々な事が判つて來ました。そして入つて來たのが李退溪の書物であります。

李退溪の書物は島津家の分捕品の中にもあつて、あすこにも出してありますが『朱子節要』が二部あります。島津家でさへも二部持つて來られた位だから、李退溪の本は各家で餘程持つて來たと思はれます。其の時分李退溪の聲望は非常に高くて、朝鮮では是より偉い人は無い位に云はれた。それは總理大臣柳成龍の『懲毖錄』に書いてあります。柳成龍も李退溪の弟子であります。さう云ふ譯で李退溪の門人が皆な要路に立つて居て、もう朝鮮の學者と云へば李退溪と云ふ様な事であつた。ですから李退

溪の著書を日本に持歸つた事は當り前であります。従つて學問と云へば朱子學、朱子學と云へばそれは李退溪から日本へ入つて來たと云ふ譯であります。

朝鮮國民性の一端

ごうして李退溪と云ふ人の本が日本でさう云ふ様に用ひられたかと云へば、御承知の通り朱子學と云ふ奴は非常に面倒である。茲で私は皆様方に朝鮮の國民性を御研究願ひ度いと思ふ事があります。それは朝鮮の人は非常な一つの長所を持つて居る。それは何かと云へば、朝鮮人が創造オリジナリテイ力を持つて居るかごうかは知りませぬ。然しながら人の拵へたものとか、人の意見とか云ふものをよく合點して、それをうまく縮めて誰にでも解り易くすると云ふ能力を持つて居る。是は昔からであります。例へば天台四教義。是は高麗の諦觀と云ふ坊さんの書いたもので、あれに出して置きました。是は今でも日本の天台の方で大切な本であると思ひます。それから『義天目錄』と云ふものがあります。私は福田行誠の持つて居つたものを出して置きました。是は一切經の目錄を最も簡明にしたものであります。一番手頃でよいもので、是が皆な朝鮮本であります。

日本の朱子學と李退溪

李退溪先生も矢張り其通りで、朱子學を日本人に解釋せしむるに非常に役に立つた。朱子は御承知の通り日本では程朱の學など云つて、朱子などはつまらなく申しますけれども、恐らく朱子程の學者は支那には居らない。あの人は學者ばかりでなく偉い人であります。其の證據には陳龍川など云ふ偉い豪傑肌の人、陸放翁、若くは陸象山と云ふ様な學者など、あらゆる人から尊敬を受けた人であります。朱子の學問は朱子學など云つて、一寸一口には解らない。云つて見れば大きな鮪の様なものである。鮪を見るとそれを食べやうと云ふ様な量見は起らない。然しながら切身になつて

魚屋の盤臺に載せられたのを見ると一皿やりたいと云ふ様な譯になる。李退溪先生は丁度其の鮪の切身を日本人に賣つた様な形で、學者がその一皿一皿を喰べて、李退溪先生を通じて、朱子學も是ならよいと云ふ事になつたのであります。朱子其儘では少し大き過ぎるのです。さう云へばまるで私が朱子の味方をして、日本人の頭が悪いと攻撃する事になりますが、其の時の日本人は今の日本人ではない。戰國時代を去ること遠からざる日本人の頭にはさうであつたらうと思ふ。そして林羅山にしても、或は山崎闇齋、貝原益軒にしてもあらゆる學者が李退溪の書物に依つて朱子學を學んだのであつて、それが維新迄傳はり、殊に私共の郷里の學風は李退溪の學問と云ふものが殆んど本もとになつて居るのであります。大塚退野と云ふ偉い先生もそれから出た。其退野先生の門から横井小楠、元田永孚など、云ふ人が出て來たのであります。そして李退溪を學んで果して李退溪の作つた鑄型の中に皆が入つたかと云へば、李退溪の信者は皆な李退溪から破門せらるゝ様な人が多い。是はごうも致方が無い。日本人と朝鮮人

との間にはそこに多少の差別があります。日本の學者は朝鮮人ほど囚はれない。朝鮮の學者は遺憾ながら學問に囚はれて自由を得ない。堅くなつて活動が出来ない。日本の學者は時としては先生の腹の中に足駄でも穿いて入つた様な觀があつて、李退溪の様な學者に對しても、少し怪しい、も少し上に行かうとする。横井小楠の作つた詩にもそう云ふ事が書いてあります。門に入る導きは朝鮮の人がして呉れた。それから先は此方でやつたのであります。それを今日は利息を付けて日本から朝鮮へ返しつゝある譯であります。

私は朝鮮の學問が色々の點に於て日本に行はれて來た事を尙ほ申上げて見たいと思ひます。然しながら何れにしても日本は朝鮮に負ふ所が非常に多い。吾々は何か朝鮮に報ひる所のものが無くてはいけないと思ふのであります。(拍手)

歴史を讀め——日鮮同源の關係

で、兎に角私は、今日の日本人は歴史を讀まないと思ふ。今日の若い人は歴史などは古臭いと云つて讀まない。一體人間が人間を學ばないで何を學ぶのでありませうか。(拍手) 私共には其處が解らない。日韓の關係を考へて見ますと、もう少し進んで見るならば、多分日本人と朝鮮人とは、總ての人とは云はぬが、朝鮮の多くの人とはもと同源であつて、或る者は朝鮮に留まり、或る者は日本に留まつたのであらうと思ひます。今日でも皆さん御覽の通り、日本人が布哇に行つて長く居つて、布哇で生れた人などが私共を訪ねて來るのを見ますと、私共は亞米利加人と思つて、まづい英語ながらハウ、ゾー、ユー、ゾーと云つて仕舞つたりする。尤も國籍は亞米利加人であるけれども、兩親共に日本人であるから、純粹の日本人に違ひないが、さう云ふ風に見えます。三四十年或は二三十年も経たないのにさうである。況んや同じ人種でも、近いとは云ひながら、海を隔てた朝鮮と日本との間だから、是が數千年別居して居れば、自然違つて來るのは止むを得ないのであります。一家の人間

でも寄宿舎に入れて置けば、久し振りで歸つた時には他所の者を見る様な氣がして、親が親でなく、子が子でない様な氣がするものです。日本人と朝鮮人どが中々しつくり行かぬのは當り前である。しつくり行く筈は無いのである。然しながら假すに時を以てすればしつくり行かない筈はないのであります。私共は朝鮮と日本との關係が昔から同源であるとは云へ、數千年離れて居つた事を考へれば、朝鮮を日本に同化するのに、三年でござうすとか、もう十年経つたからござうすとか云ふのは、如何にスピードの時代であつても、餘りに早過ぎはしないかと思ふのであります。(笑聲) 尙ほ色々申し上げたい事がありますけれども、皆様の御顔をそろく拜見して見まするのに、多少御退屈の様に存じますから、是で御免を蒙ります。(拍手)

閉會の辭

阪谷會長

大層有益なる御研究を御發表になりました、時の經つのを知らぬ位であります。決して吾々は退屈はして居らぬのであります。所が御やめになりましたのは残念に思ひます。色々な方面に於て、合併後の現在の朝鮮と内地との關係の上に、吾々の爲に參考となり、又た吾々の思想を善導する上に非常に力となると云ふ事を考へて、皆様と共に徳富先生に厚く御禮を申し上げます。(拍手)

講演並史料展覽會記事

五月二十四日青山會館に於て本會主催にて徳富蘇峰先生の特別講演會を開催した。出席者は來賓松田拓相はじめ蘇峰會々員、協會側阪谷會長、水野顧問外會員等總數三百餘名に達し、午後二時より徳富先生珍藏の朝鮮版古書並朝鮮日本間の文化史關係資料を展覽に供し、午後三時より講演開始、阪谷會長の開會の辭に次で、徳富先生は「文祿慶長以降日本に於ける朝鮮の感化」と題し約二時間に亘り先生得意の史論を試み、終つて別室の茶話會に臨み午後五時半盛會裡に散會した。因に判明せる出席者芳名及史料展覽書目は左の如くである。

出席者芳名(イロハ順) ○印は本會々員

○入 江海平氏 ○井上孝哉氏 井上和雄氏

○池邊龍一氏 石田與市氏 伊藤廣之氏
 一瀬一二氏 今村幾太氏 今村八郎氏
 今村寛喜氏 林仙之氏 土師盛貞氏
 ○春田茂躬氏 ○橋本萬之助氏 侯爵蜂須賀正昭氏
 橋口西彦氏 服部正之氏 ○西原龜三氏
 土岐弘氏 ○東條正平氏 千村長治郎氏
 遅塚金太郎氏 岡本連一郎氏 岡村利氏
 岡田松生氏 ○小幡虎太郎氏 ○大原胤夫氏
 大津一郎氏 ○大志摩孫四郎氏 大口喜六氏
 侯爵大久保利武氏 大塚吉次郎氏 ○尾崎敬義氏
 尾佐竹猛氏 ○和田純氏 ○片山義勝氏
 ○龜島豊治氏 河原秀太郎氏 河野省三氏

○川崎三郎氏 川田瑞穂氏 ○種野文雄氏
 武田舍三氏 武田勝藏氏 高橋源一郎氏
 田邊勝哉氏 田中盛秀氏 竹内榮喜氏
 坪谷善四郎氏 妻木忠太氏 中山久四郎氏
 ○中野太三郎氏 ○中島司氏 中野禮四郎氏
 中島利一郎氏 中村源治郎氏 中田敬義氏
 ○成毛基雄氏 長澤徳玄氏 村高幹博氏
 ○宇佐美勝夫氏 内田虎三郎氏 内山小二郎氏
 ○上田直秀氏 薄井福治氏 ○野口彌三氏
 能勢岩吉氏 ○久米民之助氏 ○久保田積藏氏
 黒井悌次郎氏 黒屋直房氏 ○熊本利平氏
 ○倉知鐵吉氏 ○山崎真雄氏 山本徳尙氏

山田

山田 苗氏
 柳田村治氏
 柳原隼作氏
 松田源治氏
 松尾小三郎氏
 松尾春藏氏
 松村純一氏
 松田登三郎氏
 丸山正雄氏
 丸山幹治氏男爵
 古市公威氏
 深尾道恕氏
 不破重兼氏
 布施秀治氏
 國分三亥氏
 郡島忠次郎氏
 近藤賢二氏
 後藤正基氏
 小坂順造氏
 小松謙次郎氏
 古宇田巖氏
 有田八郎氏
 有馬良橘氏
 有馬純彥氏
 阿部充家氏
 阿部秀太郎氏
 阿部三吉氏
 赤池濃氏
 赤木萬次郎氏
 荒井賢太郎氏
 安藤良温氏
 齋藤力氏
 齋藤吉十郎氏
 齋藤衛氏
 佐藤巖氏
 佐伯德吉氏

男爵

阪谷芳郎氏
 阪本鈺之助氏
 坂田長愛氏
 櫻井小一氏
 酒井忠一氏
 澤本孟虎氏
 迫田七郎氏
 木村雄次氏
 木下千次郎氏
 岸衛氏
 北村留吉氏
 光谷宗助氏
 水野鍊太郎氏
 美濃部俊吉氏
 宮部敬治氏
 三宅驥一氏
 柴田駒三郎氏
 柴田言一氏
 柴田德次郎氏
 下村三四吉氏
 白井二郎氏
 久水三郎氏
 肥田景之氏
 平尾道雄氏
 平井三男氏
 守屋榮夫氏
 守武幾太郎氏
 森安連吉氏
 森谷秀亮氏
 須藤素氏
 陶山武二郎氏
 鈴木秀雄氏
 鈴木為三吉氏

史料展覽書目

講演會當日展覽に供せられたる史料中主要なるものを摘録せり

一切經音義	法華靈驗傳	大乘莊嚴經
義天目錄	諸乘法數	天台四教義
圓鑑國師詩偈	佛祖三經	朝鮮古版孔子家語
北宋本說文正字	重廣會史	東人詩話
文章軌範	梅月堂金鰲新話	東文粹
元明清韓刊本考	文章達德錄	竹島考
水戸侯與朝鮮	歷代叙略	百宋樓藏書志
讀書敏求記	正平本論語集解	詩人玉屑
國朝寶鑑	宣廟寶鑑	青丘詩鈔

大方廣圓覺修多羅了義經	大明一統賦	睡隱看羊錄
通文館志	東國通鑑	諸國及朝鮮地圖
和國志	朝鮮史略	明史朝鮮傳
善隣國寶記	君臣畫像	豐公遺文
音注全文春秋括例始末	左傳句讀直解	懲毖錄
隱峰野史別錄	讀書錄	入學圖說
異端辨正	夙興夜寐箴	朱子年譜
朱文公年譜	擊蒙要訣	聖學輯要
小楠堂詩草	小楠遺稿	羅山林先生文集
文會筆錄	心經附註	新板延平答問
聖學十圖竝封事	朱子行狀輯註	李退溪自省錄
退溪先生自省錄	先祖退溪先生年譜	退溪言行錄

59
39

李退溪書料
退陶先生筆蹟

朱子書節要

北溪性理學

五六

文祿慶長以後
日本に於ける朝鮮の感化

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年九月十八日發行

〔非賣品〕

編輯兼發行人 中島司
東京市外北品川御殿山三百十九番地

印刷人 吉岡清
東京市麴町區有樂町二丁目七番地

印刷所 朝陽印刷株式會社
東京市麴町區有樂町二丁目七番地

東京市麴町區丸ノ内二丁目二番地
丸ノ内ビルヤング三七六區

發行所 中央朝鮮協會

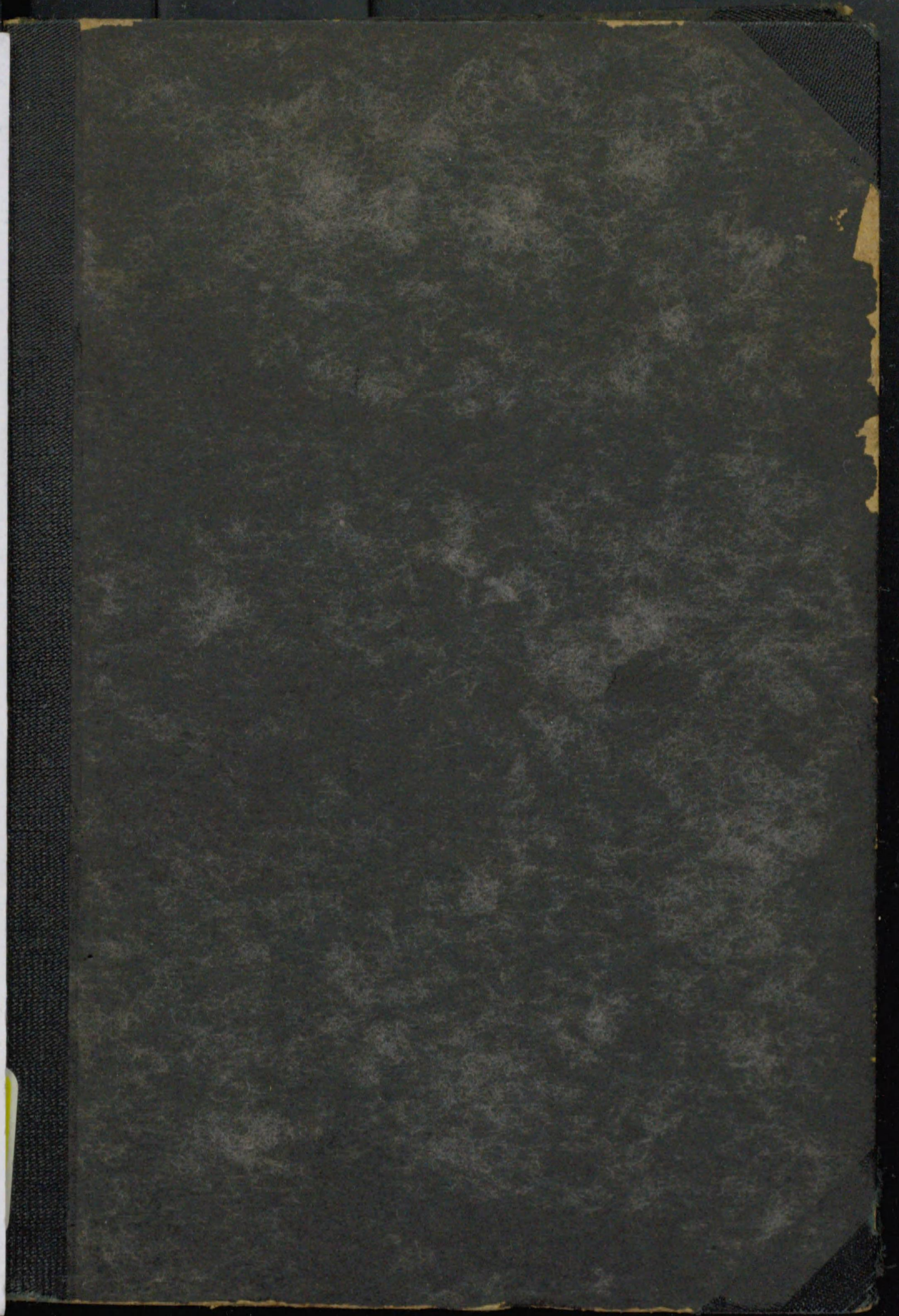
590
390

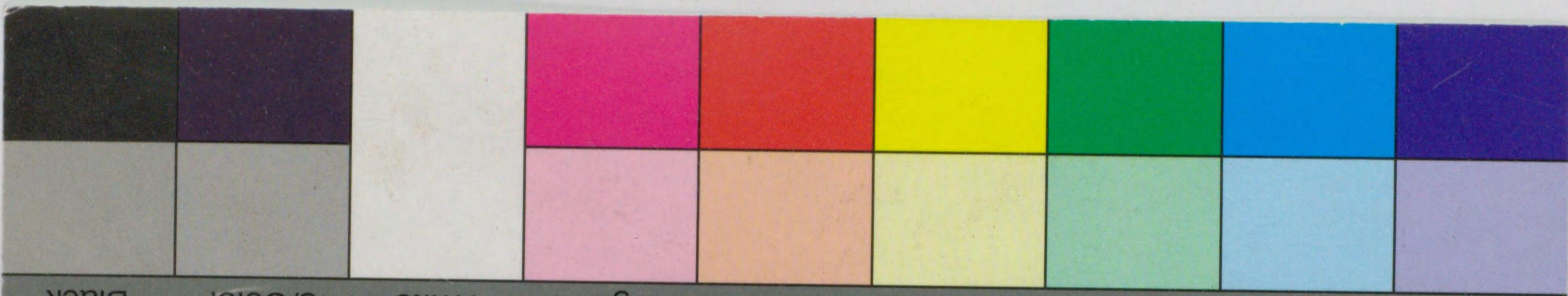
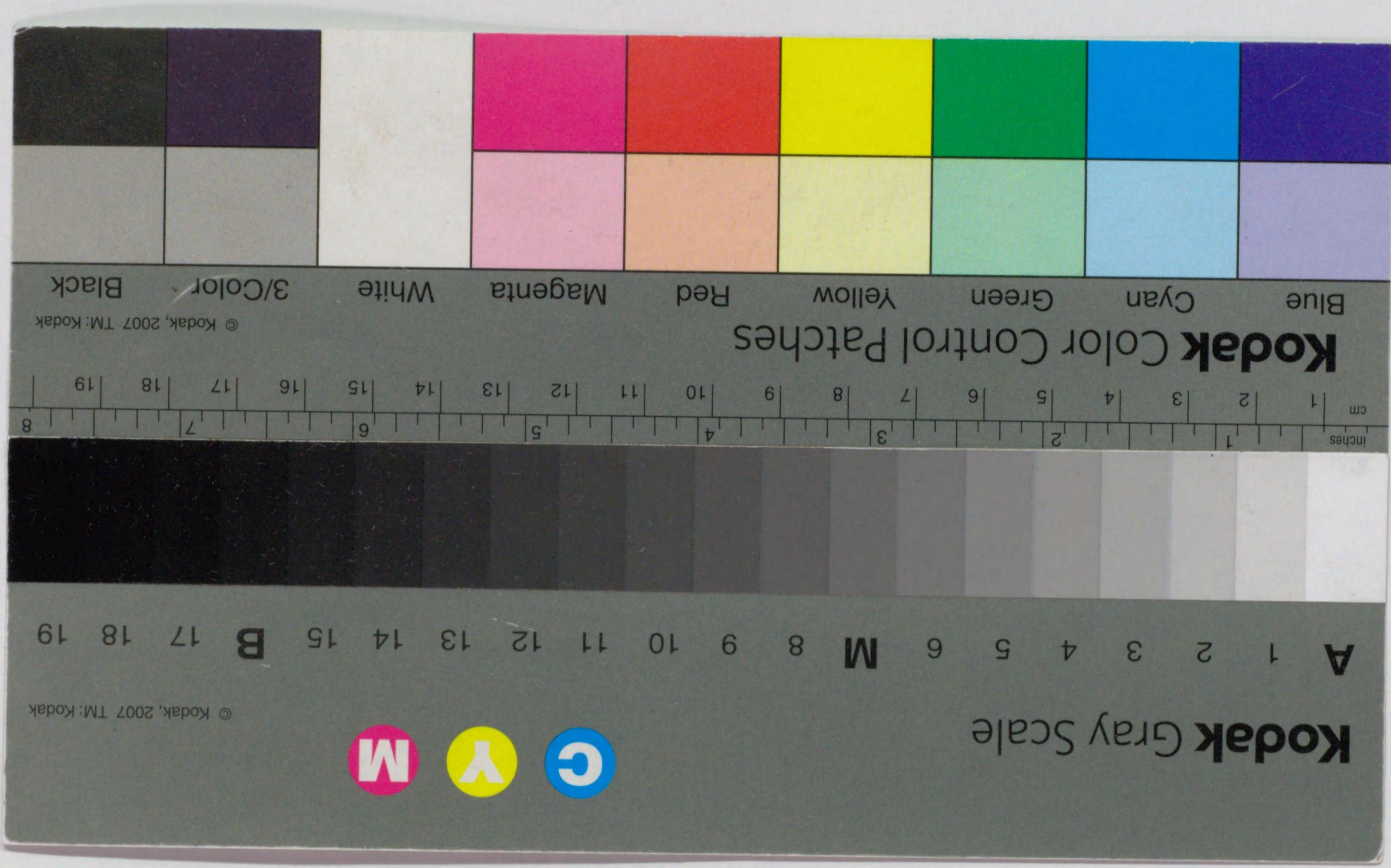
支那製其以對
日本に對する關係の總論

第一章 支那の概況	一 支那の地理	二 支那の人口	三 支那の政治	四 支那の經濟	五 支那の文化
第二章 支那の對外關係	一 支那の對外關係の概況	二 支那の對外關係の發展	三 支那の對外關係の現狀	四 支那の對外關係の將來	五 支那の對外關係の對策
第三章 支那の對外關係の對策	一 支那の對外關係の對策の概況	二 支那の對外關係の對策の發展	三 支那の對外關係の對策の現狀	四 支那の對外關係の對策の將來	五 支那の對外關係の對策の對策

590
390

590
390





© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Black 3/Color White Magenta Red Yellow Green Cyan Blue
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
M Y C